

スタンド☆エクスプローラー!

ランチア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ども、ランチアです。

息抜きにちよつと書いてみました。

例によって連載は不定期になりますので悪しからず。

目次

プロローグ	1
自堕落な男	3
美女との遭遇	10
男の能力	10

プロローグ 自堕落な男

時は近未来。

地球の気候や地表の変化、さらには海面上昇が起き、人の生活圏が少し狭くなってきた時代のお話。

緩やかに変わる世界に呼応するように、若い世代の間である特殊な力を持った者が現れるようになる。

『メテイス』

いわば超能力である。突然現れた未知の能力に人類は当初、驚愕した。だが時の流れと共に少しずつ解明され、今ではメテイスは日常の一部になろうとしていた。しかしそれでもまだ謎が多く、今日も研究が進められている。

そんな時代にある一人の男が生まれた。

その男は周囲とは違う存在でありながらも自分なりにやりたい様に行動をし、いつしか孤高の存在になりながらも健気に何とか生活していく。

これはそんな男の物語である。

「ふああ〜」

唐突に欠伸をしたこの男。

名は立川涼平。たちかわりょうへい

髪は黒の短髪。眉は他人よりも若干太く、目は腫れぼったく、そして目付きが悪い。更にはその目の下には隈もあり、不気味さに拍車をかけている。鼻は団子っ鼻で無精髭を少々生やしている。

身長は170cm弱。中背中肉。性格は少々捻くれており、周囲に溶け込もうとはしない。いわばボツチ万歳主義。

そんな涼平も去年二十歳になったばかりの青年である。無職やフ

ライターなどでは無く、ちゃんとした定職に就いている。高校卒業と同時に土木の会社に入社し、仕事がある日は毎回しごかれた。殴られたり、蹴られた事もあった。だが他に行く宛もないのでその会社に居続け、気が付けば2年が経っていた。勿論給料も高卒なので安い。その為今でも築50年以上のオンボロアパートに住んでいる。両親も何か助けにならないかと電話で連絡する度に言っているが、自分はどう社会人なので一人でいけると毎回断っている。実際に何とか生活出来てはいるが、家計が苦しいのが現状である。そして現在。

涼平はジャージの上にコートという服装でコンビニに行っている。眠いのはついさつき起きたばかりだからである。

因みに現在午後12時半。その時間まで惰眠を貪っていたのである。というのもー

涼平（朝方までゲームしたからなあ…。すっげえ眠い…。あと寒っ！）

自分の趣味に没頭した結果、こうなっただけである。

また季節は1月。つい数日前に成人式を終えたばかりである。なので今は真冬の真っ只中。昼とは言え、寒くて仕方ない。

涼平（早く買うもん買って、帰ろ）

そう呟き、コンビニへと向かった。

そんな呑気な事を考えていたからであろう。

？「…！あれは!?!？」

こちらに視線を送る者など気づく筈なかった。

この人物との出会いにより、涼平の運命は大きく変わる。

美女との遭遇

店員「ありがとうございましたー」

コンビニで買い物を買ませた涼平は店を出る。

涼平（さっ帰ろ帰ろ）

そう帰路へ着こうとすると

? 「ちよつといいかしら?」

後ろから声を掛けられ、振り向く。

そこにいたのは妙齢の女性であった。

自分よりも少し年は上であろうか、落ち着いた感じが出ている。身長は自分よりも少し低いくらい。髪は薄い翠で目も同じ色で大きくパツチリとしている。物腰が柔らかさそうで少しミステリアスな雰囲気も醸し出している。スタイルも良く何よりバストが大きい。服を着ていても一目で分かる程だ。

そんな美女が自分に何用なのか。

涼平「何かご用で?」

女性「すみません。急に声を掛けて。ちよつとお話があるんですけどお時間よろしいですか?」

勿論涼平は彼女とは初対面である。それなのに急にそう聞かれたのだ。一体何なのだと怪しむのは妥当だ。

涼平「すみませんが、どちら様ですか?」

女性「あつ、すみません。私こういう者です。」

そう言い、名刺を涼平に手渡した。

そこにはこう記載されていた。

『CSC 職員 汀 薫子』

涼平（CSC職員、ミギワカオルコ…）

CSCとは大手警備会社の名前で、メテイスパサー（メテイス使用者の名称）を多く雇用していることで知られているが、一方でメテイスパサーの軍隊を作ろうとしているなどの黒い噂も囁かれている。近年はメテイスの研究・機材開発も行っており、メテイスの実技訓練などで新機材のインストラクターも派遣している。また本部にはメ

テイス事業の拠点となっていて、独自のメテイス関連研究施設も持っている会社である。

涼平（CSCの職員が俺に何の用や？）

益々怪しむ涼平だが、彼女は続けてこう言った。

薫子「ここでは何ですし、宜しければ別の場所でお話出来ませんか？お時間は取らせませんから。」

涼平「……分かりました。」

少し間を空けた涼平だったが、特に断る理由は無かったので女性の後に着いていった。

――

薫子「ごめんなさいね、急に声をかけちゃって。」

涼平「いえ別に。暇だったんで。」

喫茶店に入り、席に着いた途端薫子はそう詫びた。涼平は特に気にする事もなくそう言った。

薫子「お詫びに此処は私の奢りでいいから好きな物頼んでも良いわよ。」

涼平「えっ、いいですよ。そこまでしなくても。」

薫子「いいのいいの、遠慮なんかしなくても。私の方が年上なんだからそこら辺は立ててもらいたいわ。」

涼平「……そこまで言うならすいませんが、ご馳走になります。」

結局は涼平の方が折れて、渋々領いた。

注文を終え、ようやく薫子は話を始めた。

薫子「まずお名前を聞いてもいいかしら？」

涼平「立川涼平です。」

薫子「なら涼平君ね。」

「涼平（いきなり名前呼びかよ・・・）」

少々戸惑いつつも彼女の話は続く。

薫子「名刺にも書いてあったけど、私はCSC本部の職員なんだけど今は出向で澄之江学園すみのえの講師をしてるの。」

澄之江学園とは上ヶ瀬市かみがせにある学園である。

まず上ヶ瀬市とは海に面した複合学園都市で、学園がある一帯の正式名称は「上ヶ瀬市澄之江学園都市町」である。海面上昇により水没した都市を埋め立てて造られた町で、異常気象などを鑑み、津波や地震などの災害を想定した最新防災設備を備えている所だ。

次に澄之江学園とはメテイスパサーの健全な育成を目的としている学園であるが、学生はメテイスを持たない者の方が圧倒的に多く、1クラス中にメテイスパサーは数人程度しかいない。また澄之江学園都市は世界でも最先端のメテイス研究機関で、メテイスパサーの研究施設の側面も持っている。

涼平「自分は講師の資格は持ってませんが？」

薫子「ああ、違うのよ。別に講師になつて欲しいっていう事じゃないのよ。実はね私講師の他にもある仕事があるの。」

涼平「というと？」

薫子「それはズバリ『スカウト』よ。といつてもさつき言った通り講師じゃなくて、メテイスパサーのね。」

それを聞いて涼平は益々混乱した。

なぜなら――

涼平「あの：自分は今までメテイスに関わった事もないですし、メテイスパサーでも無いんですが・・・」

薫子「そう・・・でもね、私の『目』にはそう見えないのよ。」

涼平「『目』・・・ですか？」

薫子「ええ。私実はメテイスパサーなの。メテイスネームは『メテイスカバリー』。メテイスを発生させてる時に出るメテイス波を視覚的に捉える事が出来るのよ。」

涼平「はあ・・・」

生返事で返したはいいものどこか腑に落ちない所もある。

涼平（まず『メテイスネーム』つつうのは多分能力名だろうな・問題は《デイスカバリー》だ。『メテイス波』って言われても分かんねえし、それを見れるつつつてもそれが俺に何の関係があるんや？）内心そう愚痴ったものの何も分からないのが現状だ。そうやって悩んでいるとー

薫子「いきなりこんな事を言っでごめんなさいね。そんな顔をするのも無理はないわ。」

よほど自分は深刻そうな顔をしていたのか。薫子は心配そうに告げた。

涼平「あつ、すみません。ご心配をおかけして。」

薫子「いいわよ。悪いのはこっちなんだから。とりあえず今迄の会話で涼平君がメテイスに関しては無知だって事は分かったから。分からない所は説明するわ。」

涼平「そうですか・・では、まずー」

涼平はそう言われたので、現時点で分からない所を薫子に聞いた。その結果、以下の点が分かった。

まずメテイスネームというのはその名の通りメテイスに付けられている名前である。メテイスパーサーは潜在的にメテイスネームを持っており、潜在意識の中でネームを探し当てて発言することにより、初めてメテイスを自分の意志で扱うことができるというものだ。そのためメテイスネームを発見・認識することが、メテイスパーサーとしての最初の一步と言われている。薫子の《デイスカバリー》もその一つである。

次にメテイス波とはメテイスを発生させている時に出るものであり、《デイスカバリー》や特殊機器により観測可能である。また基本的に固有であるが何億分の1の確率で同一のものとなることがあるらしいとのこと。

粗方の説明を聞いて涼平は大体は理解できた。しかし一つ疑問が残った。

涼平「ん？ちよつと待って下さい。メテイス波ってメテイスを発生させてる時に出るものですよ。でも自分はメテイスパーサーでもな

いのでメテイスを発生させる事なんて出来ませんよ。なのに先程汀さんは目に見えたって仰っていましたよね？一体どういう事ですか？」

そう。涼平はメテイスパサーでは無いのでメテイスを発生させる事など出来ない。なので必然的にメテイス波が出る事はまず無いのだ。なのに薫子の《メテイスカバリ》によって見えているのだ。この矛盾がどうしても気になり、薫子に質問した。

薫子「それについてだけど人によつては無意識に微弱なメテイス波を出してしまう事もあるから大丈夫よ。でも問題はそこでは無いのよ。」

涼平「何ですか？」

薫子「君から出ているメテイス波は微弱では無く、はつきり強く見えるのよ。無意識の状態でこれだけ見えるのははつきり言つて異常なの。今もそれぐらい見えてるわ。」

涼平「えっ!? ホントなんですか!? でも本当に自分はメテイスパサーでは無いですよ！」

涼平はキツパリとそう言った。そして薫子もまた頭を抱えた。

薫子「だから分からないのよ、私にも。あともう一つ分からない事があるの。」

涼平「まだあるんですか？」

薫子「正直言つてこれが一番分からないのよね。」

涼平（一体何なんやそれは!?）

不安を感じつつ、涼平は彼女の言葉を待った。

薫子「実はね私が今迄で見た事が無い様なメテイス波なの。」

涼平「? 詳しく説明願います。」

薫子「そうね・・・分かりやすく説明するとね通常だとメテイス波はメテイスパサーの体から溢れ出す様に見えるの。またメテイス波には様々な種類があるからその波の色や強弱で大まかに分ける事が出来るのよ。」

涼平「なるほど。では自分の場合はどうなってるんですか？」

薫子「それがね白い霧みたいなのが君の体全体を覆っている感じ

なの。」

涼平「・・・ふむ。」

薫子「あら？意外に驚かないのね？」

涼平「いえいえこれでも内心驚いてますよ。ただ焦っても仕方ないかなって。」

薫子「そ。殊勝な心掛けね。でもねもつと驚くべき事があるのよ。」

涼平「えっ・・・!?？」

薫子「それはねよく目を凝らして見たらね、白い霧みたいなものの中に鉛色っぽいものも見えるの。それも君の体全体から微量に出ている感じね。」

涼平「っ・・・。」

涼平は絶句した。しかしこれは自分にも分からない何かを持っていて、という恐怖心から来るものでは無い。もつと別の意味で絶句していた。

薫子「流石にこれには驚きを隠せないようね。」

涼平「・・・ええ、まあ。」

薫子「私も初めてだからすごく驚いてるのよ。こんな事があるなんてね。」

涼平「・・・。」

両者無言になり重い空気が漂う。すると――

店員「お待たせ致しました。ホットコーヒーとサンドイッチです。」
そんな空気を打ち消すかの様に注文した物を店員が運んできた。

薫子「・・・取り敢えず食べましょう。コーヒーも冷めないうちに。」

涼平「・・・はい。」

注文したサンドイッチを口に放り込み、コーヒーで胃に流し込む。そうしていると不意に薫子が告げた。

薫子「それでね、気持ちの整理がつかない時にこんな事を言うのはアレなんだけど・・・。」

涼平「何です？」

涼平はそう言った。

しかしまさにこの時薫子から発せらせる言葉により自分の今迄の

生活がガラリと変わってしまう事を涼平は知る由も無かった。

薫子 「澄之江学園に来てくれないかしら？」

男の能力

涼平「……………」

時刻は既に夜。場所は涼平が住んでいるアパートの一室。

涼平は悩んでいた。無論今日の昼の事だ。

いきなり学園に来てくれと言われてもその場でYESとは言えなかった。当然である。涼平にも生活というものがあるからだ。

涼平（どうすつかなー、今後の事もそうやけどまさかアレにも気付くとは。）

実は涼平には思い悩んでいる事がもう一つあった。どちらかと言えばそっちの方が彼にとつては重要だったりする。

涼平（汀さんが言っていた白い霧と鉛色のもの……あれって恐らくメテイス波では無いんだよねー）

勧誘された後も薫子から自分の体から発せらせるものについて詳しく聞いた。その結果、薫子は最初はメテイス波と言っていたが、正確にはメテイス波では無い何かと付け加えた。

どう言う事かというと、薫子から見て涼平からメテイス波みたいなのは見えるが、それがメテイス波かどうか分からないと言う事だ。しかし事実《メテイスカバリ》ではつきりと見えているのでメテイスの様な超常的なものである事は確からしい。だが如何せん実体が掴めないとのこと。

これは薫子にとつては人生初、それどころかメテイス研究界にとつては大発見ものらしい。

涼平（そりやそうやろ。だってそれはあん時に貰ったものやからな）

話は涼平が生まれる前まで遡る――

――

転生

それは死んだ人間が次の世界に渡り、その世界の人間として生まれ

変わり第二の人生を歩むこと。

昨今のアニメやゲームにマンガ、ここ最近では二次小説にまで定番になっているジャンルである。

なぜこんな説明をしているのか。

理由は明白。

立川涼平は転生者であるからだ。

前世では20代半ばで今と変わらず、仕事をし、休日はダラダラと家で過ごしていた。

だがある時、いつもの様に仕事の後に家に帰っていた途中でトラックと衝突した。意識が薄れゆくなか、走馬灯を見て、その生涯を閉じた。そして気付いたら白い空間にいて、そこには自らを『神』と名乗る老人に出会った。

何ともありきたりな展開である。

そしてその『神』から事の顛末を聞き、これからどうすつぺと思った。すると『神』から前世の記憶を受け継いで転生する事が出来ると言った。しかも特典付きで。

涼平はそれを承諾し、『立川涼平』として生まれ変わった。

その際に『神』から貰った特典は2つ。しかもどちらも『スタンド』であった。

スタンドとはジョジョの奇妙な冒険というマンガに出てくる架空の超能力で、キャラクター毎に固有の名前と能力がある。

涼平はその中でも第五部『黄金の風』に出てくる暗殺者^{ヒットマン}チームが使うスタンドの内2つを選んだ。

1つ目はギアツチヨの『ホワイト・アルバム』

2つ目はリゾット・ネエロの『メタリカ』

理由としては前世で第五部のアニメが放送されており、涼平はそれを視聴していた。その中でも前述の2つがえらく気に入っており、自分もどっちかで良いからこの能力が欲しいなど思っていたからだ。

『神』にこの2つのスタンドが欲しいと言ったら、意外にも了承してくれたので涼平にとっては有難い事だった。

そんなこんなで特典を貰った涼平は、無事転生する事が出来、大き

な怪我もせず、また重い病気にもならずには過ごした。ただスタンドを貰ったからには使いこなす様にしなければならぬと思ひ、暇さえあれば特訓を行つた。

最低でも原作キャラと同じくらいまではしなければならぬと思ひ、標を立て、ひたすら特訓し、またスタンドに頼るのも何か癪だなどと思ひ、体を鍛え、自分なりに格闘術も学んだ。

その結果、スタンドは原作キャラと同じくらい扱えられる様になり、格闘術の方もそれなりに使える様になった。

そして月日は流れ、高校を卒業し、無事就職する事も出来、今日まで平穩無事に過ごしてきた。

――

――場所は再び涼平のアパートの自室。

涼平は自分の生い立ちを回想しつつ、未だ思ひ悩んでいた。

涼平（正直に言つてもたぶん信じてもらえんやろうし、何よりあまり目立ちたくないなあ・・・）

そうグダグダ悩んでいて、ふと時計を見た。

涼平（もう10時か。・・・しゃーねー、スタンドの事は追々考えるとしてスカウトを引き受けるかどうか考えるか。）

涼平は一旦、スタンドの事は後回しにしてスカウトのことについて考え始めた。

涼平（まず受けるかどうかや。色々考えたが、これは受けても問題なさそうやな。待遇も今の会社よりもええし。）

薫子からある程度の説明を受けていた涼平は意外にもすんなり受け入れていた。

やはり高卒では安月給であつたのは否めず、遊びたい年頃なので給料が上がるといふ点で惹かれたのだ。また学校周りの施設も充実しているのもそれについてもなお良しと思つたのである。

涼平（早速明日から色々準備するか。そうと決まれば寝るとしよう。）

そう思い、涼平は風呂と夕飯を済ませ、寝る準備を始めた。